

平成31年度第1回かわさきパラムーブメント推進フォーラム

1 日 時 平成31年4月10日（水）10時～11時30分

2 会 場 川崎市役所 第3庁舎18階 大会議室

3 出席者

【委員長】 福田市長（委員長）

【顧問】 中森顧問、細倉顧問

【委員】 大塚委員、小倉委員、菊地委員、杉山委員、瀬戸山委員、多田委員、
丹野委員、土岐委員、中澤委員、山崎委員、山田委員、湯浅委員、
横島委員

【事務局】 加藤副市長、向坂市民文化局長

（市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室）

原室長、成沢担当課長、井上担当課長、笹倉担当課長、

鴻巣課長補佐、太田担当係長、小池担当係長、永田担当係長

山城職員、奥貫職員、小西職員、田中職員

市民文化局コミュニティ推進部 中村部長

市民文化局市民スポーツ室 山根室長

市民文化局市民文化振興室 山崎室長

健康福祉局障害保健福祉部 西川部長

4 議 題

（1）かわさきパラムーブメントにおける昨年度及び今年度の主な取組について（公開）

（2）英国事前キャンプにおける昨年度及び今年度の主な取組について（公開）

（3）その他（公開）

5 傍聴者 1名

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

皆さん、おはようございます。定刻になりましたので、ただいまから平成31年第1回かわさきパラムーブメント推進フォーラムを開催させていただきます。

議事に入るまでの間、進行は私、オリパラ推進室の原が務めさせていただきますので、よろしくお願いします。着座にて進行させていただきます。

まず、何点か事務連絡をさせていただきますけれども、本日のフォーラムについては公開となっておりますので、傍聴を許可しておりますことをご了承いただきたいと思います。また、会議につきましては、発言の内容を記録いたしまして、発言者の氏名も含めて、後日ホームページで公開させていただきますので、よろしくお願いいたします。

次に、配付資料を確認させていただきますと思います。お手元に次第、その後ろに座席表、委員名簿、委員名簿については、欠席の旨ご連絡をいただいている委員は、その旨を記録させていただいております。その次に要綱がついております。

次に、資料1でA3の資料がございます。その後ろに参考資料として新聞記事の写しがございます。続きまして、「ワクワクのつくりかた」という別紙1、次に別紙2として「かってにおもてなし大作戦」のチラシ、続きまして別紙3の後ろに「Colors展」のチラシと展示会のプログラム、そして「パラムーブメントとアート～生きる力～」という2月に開催されたイベントのチラシが入っております。その次にA3の資料2が1枚、その次にA3の資料3がお手元に配付されておりますが、過不足等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

続きまして、本日、先ほど委員名簿に欠席の旨記載させていただいているとお伝え申し上げましたが、共同委員長であります成田委員、須藤委員、栗山委員、中村委員が欠席となっております。そして、中澤委員につきましては、電車が遅れているということで、少し到着が遅れているかと思います。遠藤委員についても遅れるのではないかと考えています。

続きまして、事務局のご紹介をさせていただきますと思います。4月に人事異動がございまして、私どもの上司でございます市民文化局長が向坂となりましたので、ご紹介させていただきます。

【向坂市民文化局長】

4月1日から市民文化局長を拝命しました向坂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

続きまして、オリンピック・パラリンピック推進室につきましても、3課長体制となりまして、まずオリンピック・パラリンピック推進担当の成沢でございます。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

成沢でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

続きまして、エンゲージメント担当の井上でございます。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

井上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

続きまして、事前キャンプ担当の笹倉でございます。

【笹倉オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

笹倉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

ありがとうございました。事務連絡は以上でございます。

それでは初めに、福田市長から皆様にご挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

【福田市長】

改めまして、皆さんおはようございます。年度当初、大変お忙しい中、ご出席をいただきましてほんとうにありがとうございます。今回は今年度になって初めての推進フォーラムということで、よろしくお願いいたしますと思います。

今日は昨年度の取組と今年度何をやっていくかというご報告をさせていただくとともに、英国の事前キャンプへの準備が着々と進んでおりまして、まだ先だなと思っていたらもう500日、東京大会まで切っているということでございますので、私たちの準備もしっかりやっていかなくちゃいけないなと思っています。すばらしい方々に委員になっていただいておりますので、皆様のご意見を多くいただけるように説明はなるべく簡潔にさせていただいて、積極的なご意見をいただければと思っています。今日もどうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

ありがとうございました。

それでは、会議の進行につきましては、委員長でございます福田市長が務めますので、よろしくお願いいたします。

【福田市長】

それでは、資料１の昨年度の主な取組について、資料２、今年度の主な取組予定についてをご覧くださいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いします。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

それでは、Ａ３の資料１をご覧くださいと思います。かわさきパラムーブメントの昨年度の取組についてご説明いたします。

昨年１１月にこのフォーラムを開催しておりますので、本日ご説明する内容はその後に取り組んだものとなっております。また、取組の中には委員の方々にかかわっていただいているものもございますので、後ほど補足をお願いできればと存じます。

それでは初めに、商店舗におけるかわさきパラムーブメントの実践事業でございます。こちらは一昨年のこのフォーラムで、成田共同委員長をはじめ、中澤委員や杉山委員などからもアイデアを出していただいたものでございます。

資料の下イメージ写真をごらんいただきたいんですけども、市内の商店舗等が「パ」のロゴステッカーと、例えば車いすWelcomeのようなおもてなしの内容をステッカーに表示して店頭に掲出することで、障害のある人などが生き生きと暮らせるまちづくりを目指すものでございます。

昨年の１２月１１日から２０１９年度末までに１，０００店舗達成することを目標に、実践店の募集を開始しておりまして、本日現在で５６７店舗が登録されております。登録店舗のうち４２店舗については、ＮＰＯ法人アクセシブル・ラボ様にバリアフリー調査を実施していただき、そのうち３店舗については成田共同委員長にもご協力いただきました。登録店舗の内訳等は資料に記載のとおりでございます。また、参考資料に新聞記事がありますので、それは後ほどごらんいただければと思っております。

今後につきましては、さらに掲出店舗を増やしていく必要がございますので、商店街やチェーン店等へのアプローチを継続してまいりたいと考えております。

次に、右にまいりまして、「ワクワクのつくりかた～オープンエアメーカーになろう！～」の絵本についてでございます。こちらはＮＰＯ法人高津総合型スポーツクラブSELF様のご協力のもと、スポーツ庁の委託事業として作成したものでございまして、共生社会の

担い手となる子供たちの心を育むため、みんなが笑顔になる：ワクワクするようなヒントを、スポーツを題材とした物語を通じてわかりやすく示しております。

こちらは別紙1に絵本のコピーがございますので、後ほどご覧いただければと存じますが、この絵本につきましては今後、公立小学校の図書館への配布を行っていくとともに、市内の中学校、高校や特別支援学校へも順次配布してまいります。また、去年は宮前区の白幡台小学校で絵本を活用したワークショップ型の授業を展開しておりまして、今後も授業での活用を見据えながら、市内の小学校と連携していきたいと考えております。

次に、その下にまいりまして、パラムーブメントアクション（かつてにおもてなし大作戦）についてでございます。こちらは人々の機運が高まる東京オリンピック・パラリンピックの開催をきっかけに、かわさきパラムーブメントや英国おもてなしに関する、自身の「やりたいこと」をマイプロジェクトとして実践することを通じて、地域で仲間とともに活動することの楽しさを体感してもらい、かわさきパラムーブメントの理念浸透を図るものでございます。

去年は市内の4地域で市民講座を実施しまして、合計で約80人の方にご参加いただきました。2月24日と3月3日には、小さな実践という形で、全部で47のマイプロジェクトが実施されました。また、3月8日には、次年度につなげるための参加者による報告会、交流会を開催しまして、そこでは山崎委員にもご講演をいただいたところでございます。

プロジェクトの内容につきましては、後ほど別紙2をご覧いただければと存じますけれども、昨年度は地域で活動することの楽しさに重点を置いたため、正直なところパラムーブメントや英国おもてなしに関するマイプロジェクトというものは多く見られませんでした。今年度はその点を課題と捉えた上で、さらに地域で主体的に活動する人を増やしていくということと、企業や既存の活動との連携の拡大も図ってまいりたいと考えております。

資料を1枚おめくりいただきまして、ブリティッシュ・カウンシルとの連携事業でございます。昨年度はドレイク・ミュージックとストップギャップ・ダンスカンパニーという2つの英国のアート団体と連携した取組を実施いたしました。

まず、ドレイク・ミュージックでございますけれども、こちらは音楽とテクノロジーの融合によってあらゆる人が音楽に親しみ、創造性を発揮できる社会の実現を目指す団体でございます。言葉だけではわかりづらいので、動画があるのでちょっとご覧いただきたいと思います。

(映像上映)

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

こちらの方はもともとギタリストで、ギターとかピアノを弾いていた方なんですけれども、脳性麻痺が進行して、ピアノとかギターがうまく弾けなくなり、手にグローブをはめて、手を動かすだけでいろんな音が流れるという技術を駆使して、障害があっても音楽を楽しんでいます。これはどうなったらこういう音がするのかということは企業秘密らしくて教えていただけなかったんですけれども、障害があってもこういったことにうまく携われるということをやっている英国の団体でございます。

当日はこのドレイク・ミュージックのメンバーが講師となりまして、市内で活動するプロの音楽家やテクノロジストなどを対象に、障害のある方が音楽に親しめるようにするためのファシリテーター育成トレーニングや、障害のある方も交えた音楽づくりのワークショップなどを実施いたしました。

次に、ストップギャップ・ダンスカンパニーでございますけれども、こちらの様子は、NHKの取材を受けて、3月22日の首都圏ニュースで放映されておりますので、5分ほどになりますけれども、動画をごらんいただきたいと思います。では、お願いします。

(映像上映)

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

ありがとうございました。こういった形で高津区のほうでワークショップを行った、動画のとおりなんですけれども、今後の展開につきましては、今回のドレイク・ミュージックにしましても、ストップギャップ・ダンスカンパニーのダンスにつきましても、参加される方のモチベーションの維持向上のためにも、人前で表現するという目標があったほうがよいと考えておりますので、2020年に何らかの形で公演するという事を視野に入れまして、昨年度のトレーニング参加者との連携によるワークショップやフォーラム等の実施、そんなことを通じて新たな参加者を増やして、取組をさらに広げてまいりたいと考えております。

次に、右にまいりまして、「Colorsかわさき展」についてでございます。こちらは、パラムーブメントの目指す社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）の実現に向けまして、障害のあるなしにかかわらず作品の魅力を感じることができる展覧会として開催いたしました。約40人のアーティストや、川崎市立の特別支援学校の子どもの作品を展示しまして、一部を除く作品については期間終了後に入札で購入することができまして、24

の作品が実際に販売されました。また、開催期間中には「Colors art fair」としまして、アーティストとの交流会をはじめ、シンポジウム、切り絵、ライブペイント、ダンスのワークショップ、コンサート、講座などを開催いたしました。なお、アンケート結果につきましては、別紙３にございますので、後ほどご覧いただければと存じます。

次に、資料の下にまいりまして、共生社会ホストタウン連絡協議会についてでございますが、こちらは東京２０２０大会におけるホストタウンのうち、共生社会の実現に向けて積極的に取り組んでいる自治体を、特に共生社会ホストタウンとして国が登録するものでございまして、パラムーブメントを推進している本市も登録されております。本件につきましては時間の関係もございますので、詳細は後ほどごらんいただければと存じます。

次に、資料２をごらんいただきたいと存じます。左側は、ただいまご説明した資料１以外の継続的な取組が記載されております。時間の関係もございますので、説明は省略させていただきますが、１点だけ、お手元でございますけれども、障害者の短時間雇用の関係で、「やさしい雇用へのアプローチ」という冊子を健康福祉局で作成しました。自治体初と書いておりますけれども、新しい取組ということで、こちらも後ほどごらんいただければと考えております。

それでは、次に資料の右側をごらんください。今年度予定されております新たな取組についてご説明いたします。

初めに、一番上の囲みですけれども、こちらは行政サービスにおける新たなバリアフリーへの取組についてでございますが、こちらはタブレット端末を全区役所に導入いたしまして、これを活用してテレビ電話による１３カ国語の外国語通訳と聴覚障害者のための遠隔コミュニケーション支援、手話通訳ですけれども、こちらを試行的に実施してまいりたいと考えております。

また、その下になりますけれども、オストメイトに対応した前広便座の計画導入というものをご考えてございます。こちらは人工肛門の方が排泄する際に、通常の便座ではかがんだりする必要がありまして、体への負担が大きいということで、これを既存の温水便座から交換することで容易にストーマーからの排泄ができる前広便座というものがございまして、こちらを庁舎や公共施設に計画的に導入していくものでございます。今年度は第１段階としまして、市民サービスの最前線である区役所等に導入しまして、来年度以降は年度ごとの平準化を考慮しながら、市民利用施設へ順次拡大してまいりたいと考えております。

次に、真ん中にまいりまして、クワイエットアワーについてでございます。発達障害と言われる人の中には、音や光、においといったものに対する感覚過敏の特徴のある方がいらっしゃるまいりまして、外にお出かけ、特に日常生活に欠かせない買い物では、例えばスーパーでは購買意欲を高めるためにBGMが流れていたり、生鮮食料品売り場では照明が強くなっておりまして、こうした環境が買い物をする上で、発達障害、感覚過敏の方にとってはバリアになっているという面がございます。

既に英国とかオーストラリアでは、企業、行政、大学、当事者など、地域一体となって特定の時間帯について音や光を緩和させて、感覚過敏のある方でも安心して買い物等ができる環境を一部実現しております。ただ、まだ日本では実施されたことがないと聞いております。そこで、本市におきましても、日本初の取組として、まずはトライアル的に実施できるよう、現在、当事者団体や産・学とも連携しながら検討を進めているところでございます。

次に、下にまいりまして、サイバスロン車いすシリーズ日本2019の開催についてでございます。サイバスロンとは、障害のある人たちが先端科学を駆使したアシスト機器を使って、日常生活に必要な動作で競い合う国際競技大会でございます。脳コンピューター、機能的電気刺激、電動義足などの6つの競技からなるんですけども、今回はサイバスロンシリーズの一環としまして、車椅子についてカルッツかわさきで5月5日に開催されるものでございます。他の5種目については、ロシアや香港などで開催されることとなっております。また、この大会はさまざまな民間企業と連携しており、資料にあるような社会実験を行う予定であります。

こちらにサイバスロンの青いチラシが1枚ございますけれども、大会の観覧は無料でございますので、お時間が許せば委員の皆様にもお越しいただければと存じます。

長くなりましたけれども、資料1、2のかわさきパラムーブメントの取組に関する説明は以上でございます。

【福田市長】

ありがとうございました。

それでは、今報告させていただきました取組に、各委員の方に深くかかわっていただいているものがございますので、少し補足的なものを含めてご発言をいただければと思うんですが、まず資料1の2にございました「ワクワクのつくりかた～オープンエアメーカーになろう！～」に取り組んでいただきました菊地委員から少しご説明いただいてよろしい

でしょうか。

【菊地委員】

それでは、ご説明いただきましたが、少し補足をさせていただきます。今日プリントで「ワクワクのつくりかた」というのをつけさせていただきました。ちょっと時間がないので、これは非常にわかりやすい内容になっておりますので、また後刻見ていただければと思いますが、これをつくった経緯等を含めてちょっとご報告を差し上げます。

まず、この絵本を作成することになった経緯、目的でございますけれども、プロジェクトの初年度、2018年でございますが、調査をまず行いました。子どもたち、小学校4年生から中学校3年生の中に、障害者に対して遠慮は少ないけれども、どうしていいかわからないという意見が多く見られました。保護者の方々は、何をしたらいいかわからないけれども、やっていいかどうか遠慮してしまうというご意見が多く見られたところでございます。

そんな中で、一般小学校では中高学年の時期に福祉授業も行っておりますので、そこでわかりやすい資料として絵本が有効ではないのかなと実行委員会で審議をした結果、作成することになったという経緯がございます。

先ほどのご説明の中にもありましたけれども、具体的に白幡台小学校で授業を行いました。全体で45分のパッケージでございましたけれども、1番として目的の共有、2番、読み聞かせ、3番、スポーツワークショップの説明、4番、ワークショップの実施、5番、途中で有効事例の共有、6番、ワークショップの続きを行い、7番、振り返り、発表や感想ということで進行してまいりました。目的を伝えてから読み聞かせとワークショップを行ったところ、ほとんどの子どもたちが楽しみながら創意工夫をしていたということでございます。

市内の学校での水平展開を見据えたものなので、スポーツ用具はその学校にあるものを利用して実施してまいりました。4、5人程度で1班となり、その中で1人が手が動かないとか、目が見えないという障害を持つ役割をしました。障害の有無にかかわらず班全体で楽しめる遊び方を見つけることを促してまいりました。

ワークショップのとき、子どもたちの自主性や創造性、遊び心を引き出すため、指導者は安全管理のみで、内容に関しては基本的に手や口を出さないように努めてまいりました。自由にやっていると、いわゆるパラスポーツの原点、原型が見えてきたということでございます。また、単に競い合うということだけではなく、より協力しながら競い合えるよう

なルールを創意工夫していたのが印象的でした。

振り返りのときの児童の言葉には、障害について、そして障害のある人とのかかわりについて、自分事としての意見が多く見られました。一定の成果は上げることができたのではないかと考えております。

今後の展望といたしまして、川崎市内の小学校の教員の方々向けの研修会を行い、それぞれの現場に合わせた形で随時導入、活用できるようにしていきたいと考えております。また、各学校の図書室にこの絵本を配備することで読み聞かせ図書として活用していただき、身近なものとしていきたいと考えております。全国では障害理解啓発という名で進められているこの事業でございますが、川崎市はオープンエアメーカーということで命名して、より自分事として捉えていく材料にしていきたいと考えております。

雑駁ですが、以上でございます。

【福田市長】

ありがとうございます。それぞれコメントはあると思いますが、1回まず報告をいただいてから皆さんからご意見をいただくという形にさせていただきたいと思います。

それでは、パラムーブメントアクション（かつてにおもてなし大作戦）について、山崎委員からお願いいたします。

【山崎委員】

大阪からやってまいりました山崎と申します。ずっと会議に出られてなくて、今日初めて来たら、こんな会議だったんだ、ジャケットぐらい着てくればよかったなとか思っているところでして、すみません。ネクタイも何にもしないままに来てしまいました。

川崎市さんと一緒に「かつてにおもてなし大作戦」というプロジェクトを担当させていただいています。ふだんはコミュニティデザインという仕事をやっていまして、もともと公共建築の設計などをやっている建築家、デザイナーだったんですけれども、地域の方々の意見を聞きながら設計を進めていかなきゃだめだろうなと思うようになって、住民参加型のワークショップという仕事をよくやるようになってきました。

そうしたら、別に建物を建てる時だけじゃなくてもみんなの意見を聞いたほうがいいんじゃないかと思うようになりまして、最近では福祉であったり、社会教育であったり、アートの作品をつくる時であったり、何かプロジェクトが立ち上がったなら常に地域の方々に集まっていただいて、ぜひ一緒にワークショップをやっていこうということをやっています。

近くでは横浜でO! MORO LIFE PROJECT（オモロプロジェクト）というのを担当させていただいてまして、これも障害のあるなしという言葉はあんまり出してないんですけども、さまざまな特性を持った方々が一緒にカンパニーをつくろうとって、一つ今、オモロカンパニーという会社をつくっているところですけども、そのような仕事をさせてもらっています。

今回、川崎市さんと話をさせてもらっている中で、もちろんインクルーシブとか障害という言葉を出して、こういうことに興味のある方々、一緒に活動しましょうという横浜のようなやり方を進めていくのもいいかなと思ったんですけども、パラムーブメントの中で今日紹介していただいたように、いろんな取組が既にあって、こういうことがあるのであれば、むしろ我々は一旦障害や外国人という言葉を表に出さないで、我々が勝手にほかの人たちをおもてなしするとしたら、何ができるというところからスタートさせてみませんかということを提案させてもらいました。

ふだんであればワークショップをやって80人の方が来てくれたら、大体10チームぐらいつくるんですね。8人ずつぐらいで話し合って、どんなふうにおもてなししますなんていうワークショップを何回か繰り返すんですが、今回はそのやり方も変えてみまして、1人でもいい、2人でもいいけれども、なるべく少人数でやってくださいと。何か自分がおもてなししてみたいと思う趣味の活動でもいいから、誰かにそれをおすすめするという活動をまちなかで展開してみませんかという呼びかけ方にしました。

なぜかという、10チームぐらいにまとめちゃうと、8人で話し合うので、とがった企画になりにくいんです。これやってみたいなと思っているんだけど、ちょっとこれはマニアック過ぎるかなとか思って、残り7人の意見に合わせちゃう。そうすると、8チームできたんだけど、まあまあ何となく政治的に正しそうなプロジェクトばかりがまちなかに生まれることになっていたんで、今回は3人、人が呼べればいいです、3人以上人が来てくれるプログラムだったら何でもいいですと。なので、家族でも友達でもいいから、3人以上誰かが呼べるようなプログラムを、1人か2人でやってみてくださいという問いかけ方にしました。ワークショップで話し合っている間に1人でやると言って町なかに飛び出していった人もいますし、友達を誘って3人でやらせてくれと。そうしたら、1人ずつ友達を呼んできたなら3人は来てくれるからなんて言ってやった人たちもいました。

その結果、80人の方々が47のプログラムを、川崎市内のいろんなところで実施してくれることになりました。もちろん目的は先ほど申し上げたとおり、障害であったり外国

人の方に広げていくことですので、ワークショップの間に1割ぐらいの時間はそういう情報を提供したりとか、そういう宿題を出してみたりとかして、ちょっと考えるきっかけを持ってもらいました。

なので、今回勝手におもてなししてもらった人たちが、直接的に障害、外国人の方々に特化したプログラムをやったという事例はあんまりなかったんです。それでも4つか5つぐらいはそういうことを意識していたので、40のうちの1割ぐらいがそういうことを意識し始めていたんですけれども、むしろ最初からそこにフォーカスしてしまうのではなくて、自分発信で、自分からくすつと笑えるようなことをまちに展開してみたら、それがその他の人たちにもちょっとずつ喜んでもらえたということを繰り返す中で、2020年までの間には、この人たちは実はいろんな特性の方々ですね、文化の方々と一緒に何かを楽しむということが当たり前になっているという状況に持ち込んでいきたいと思っています。

なので、ちょっと奇妙なタイトルで「かつてにおもてなし」と言っていますが、これは言語であったり、身振り手振りであったり、いろんな使える自分たちの技術を生かしながら、自分たちが今まで触れ合ってこなかった人たちと触れ合っていこうということを目指しています。

結果的に3人以上集まればいいよと言っていたんですけれども、大体20人以上集まっていたので、40のプログラムで多いところだと200人ぐらい集める人もいましたけれども、20人、30人ぐらいの人たちを呼びながら、いろんなプログラムが展開できるということがわかってきましたので、この方々が40以上のプログラムに増えていって、あるいは100人以上の人たちを呼ぶようなことになると、4,000人、5,000人の人たちから一緒に何かを考え始めるというムーブメントにつながっていくのではないかと思います。

なので、今お話ししたとおりです。我々は最初に何か枠を特化していくというよりは、あなたが何かほかの人とくすつと笑えることをやってみたいと思うことを町なかでやってみてください。これをちょっとずつ広げていくときに、ちょっと意識してほしいことがあるんです、パラムーブメントということをちょっと意識してほしいんですということを伝えていきながら、2020年までの時間を過ごしていけたらいいなと思っています。

したがって、先ほどもご紹介いたような、ほかのプロジェクトの方々がどんなことされているのかというのも常に情報としていただきたいと思っていますし、その方々と緩やかに連動しながら、そっちがそういうことをやっているんだったら、こっちはこんなことで

応援できないかなみたいな連携をさせてもらえるととってもうれしいと思っていますので、この会議にもなるべく出られるようにしたいと思っていますけれども、川崎市役所の方々を通じてパラムーブメントがほかにどんなふうに動いていっているのか、こんなところを共有させてもらいながら進めいければうれしいと思っています。以上です。

【福田市長】

ありがとうございました。

続きまして、ブリティッシュカウンシルとの連携事業について、湯浅さんからお願いできますでしょうか。

【湯浅委員】

ありがとうございます。ブリティッシュカウンシルの湯浅と申します。よろしくお願いします。前回の会議に参加できませんでしたので、今日初めての参加となります。大変いい機会を与えていただいたと思っております。

ブリティッシュカウンシルをご存じない方も多いかと思いますけれども、英国の公的な国際文化交流機関です。かなり川崎市さんには英国のオリンピックチームがお世話になりますので、英国全体としていろんな面で交流をさせていただいておりますけれども、英国は皆さんご存じのとおり、2012年にオリンピック・パラリンピック競技大会をホストいたしました。特にパラリンピックの後のレガシーというものは非常に大きいもので、もう7年たっておりますけれども、あれが契機になっていろいろなことが変わっています。

特にスポーツへの障害のある方の参加ですとか、ハード面やソフト面でのアクセシビリティの向上ということももちろんなんですけれども、私が特に担当している文化芸術の分野においても、障害のある人だけではなくて、ありとあらゆる人たちがアートの担い手であり、アーティストであり、そして参加者であって観客であるという、あらゆる方たちが参加できるということを非常に強く推進しています。とはいえ、パラリンピックがあったら、全てが変わるということはないわけです。パラリンピックを契機にそうした理解が促進し、そして7年たっても今いろんな取組が行われているという、まだ旅路の途中というのが英国なんだと思います。

そうした中で、今回川崎市さんと2020に向けていろんな形で交流させていただいているというのは、英国のアーティストにとっても非常に大きいい機会であるというふうに直接話も聞いています。

特に今、英国の文化の面でのお話をしましたけれども、文化政策の中において、イコー

リティー、ダイバーシティ、インクルージョン、いわゆる平等性、多様性、包摂性というのは主要なテーマの一つになっています。英国の考え方の中心というのが、障害については社会モデルというのが全ての基盤にあります。日本でも今、社会モデルという言葉が聞こえ始めていると思いますが、障害のある方たちに問題があるのではなくて、そうしたバリアをつくり出している社会に問題があるんだ、だからこそそれを取り除くんだという形で、人々を中心に据えたピープルセンターのあり方というのが英国の取組です。

私たちもここ数年、川崎市さんと協働させていただいている中で、一過性のイベントではなくて、2020年を契機にそういった形の考え方や姿勢、レガシーがつながっていくような形に、文化面でもお手伝いできればいいなと思って計画をしています。

そうした中で、今回ドレイク・ミュージックとストップギャップのプロジェクトをさせていただいて、既に映像も出していただいたので、特にご説明することはあまりないんですけれども、特にドレイク・ミュージックについては障害のある、例えばオーケストラの音楽家、コンサートホール、フリーランスの音楽家だけではなくて、テクノロジーというのが非常にキーになっていまして、テクノロジストの方との協働であったり、福祉関係者、教育関係者、ありとあらゆるセクターが協働して、障害あるなしにかかわらず全ての人が音楽ができる、障害があるから音楽家になることを諦める社会ではないものを目指そうというのが基本にあります。

ドレイク・ミュージックの方々、今回2回目の来日なんですけれども、川崎市さんとの協働はとてもいい機会、彼らにとってもインスピレーションと勉強になるということ、を非常に言っていました。特に日本はテクノロジーがとても進んでいると思います。川崎市さんにもいろいろなテクノロジー関係の企業もありますし、大学もあったり、いろんなイノベーションが非常に進んだ都市でもあると思いますし、またパラムーブメントの取組をされている中で、ドレイク・ミュージックもこれを通じて一緒に旅をしていきたいと言っていました。

ストップギャップのことも先ほど見ていただきましたけれども、こうしたプロジェクトを通じて、先ほど申しましたようにさまざまなネットワークが日本と川崎だけではなくて、日本の中でも多様なセクターとの連携がつながればと思います。

そして、キャンプでお世話になりますけれども、スポーツだけではなくて、文化面でもさまざまな取組をしながら、このパラムーブメントと一緒に推進していくようにできればと思っています。

1つ、私たちがプログラムの中で非常に大事にしているのは、イベントとかワークショップだけではなくて、実際に参加される、協働していく人たち、一緒に皆さんとやっていくものなので、実際の障害の社会モデルについて考えていくようなトレーニングとか、そういうものも入れて、今丁寧にプログラムを推進させていただいております。今年、また来年度、そしてそれを契機に、その先に向けて一緒にプランニングができればと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

【福田市長】

ありがとうございました。

それでは、「Colorsかわさき展」のことについて、多田委員からお願いできますか。

【多田委員】

別紙3に先ほどご紹介いただきましたColorsかわさき展のアンケート調査を中心に、資料を配付させていただきました。今回のColorsかわさき展は昨年11月16日から25日に開催し、延べ1,600名を超える方にご来場いただきました。昨年、この会議の中でご案内したときは、前回の実績、1,000人弱だったんですけれども、それを大幅に上回るということを予測していましたが、そのとおりになりました。

前回は開期が15日間だったんです。昨年のColorsかわさき展は開催日数を10日に短縮しました。いろいろな利用者のアンケートですとか参加者のアンケートでは、一昨年の平日は入場者が20名ぐらいという日もあって、ちょっと間延びをしたんじゃないかというご指摘もありまして、今年は10日間にしたんですが、大体1日の来場者は3倍近くになりました。小さいんですけれども、上のほうにその日の来場者、それからアンケートをいただいたという記載がございますので、後ほど参考にさせていただければと思います。

今回のColorsかわさき展の特徴は、障害のある方の作品を一堂に会しまして、なおかつそれをポスティング方式で希望者の方に開期終了後、入札していただく。間に入ったアートディレクターが責任を持って、それぞれの応札した方と売買契約が成立するというお手伝いをこの中でしてきました。初めての経験という方も多かったので、作品を売買することによって抵抗があった方もいらしたんですが、こういう仕組みになって、結果的には24点の作品が無事に落札できました。前回の作品展での出典は22点だったんですが、今回40点ということで増えてきてまして、アンケート調査については、回収率が21%なんです。おおむね賛成の方や積極的に支持して頂いた方がアンケート調査にご協力をいただけたようです。

それから、展示会の開催情報の関係ですけれども、知人ですとか作品を出した方からの口コミというのが多くて、これが私どもの情報発信ということに少し課題があるかなと思います。

いずれにしても約20%のアンケートの回収率ですので、これが全てとはならないんですけれども、後半のアンケート調査の21ページ以降は来ていただいたお客さんではなくて、今回のColorsかわさき展に参加いただいた各施設の担当職員を中心としたアンケート調査で、ここについてはいろいろ課題もいただいているところでございます。こうした課題を克服しながら、今年度も続けていきたいと思っております。

全般的に、1回、2回ではなくて、継続することについて大きな期待をいただいておりますので、2019年度につきましてもこうしたご意見を踏まえながら進めてまいりたいと思います。あわせまして、このColorsかわさき展のチラシと、前回お配りできなかったパンフレットにつきまして、作品のご紹介も含めまして今日配付させていただきました。

それからもう1枚、一番最後になるんですけれども、2月9日のシンポジウムの資料というのがここに入っているんですが、ほかの項目と思ったんですけれども、ちょっと関連があります。今回のColorsかわさき展にご協力いただいたアートディレクターの太平さんをはじめ、関連する皆さんに集まってもらったシンポジウムが「パラムーブメントとアート～生きる力～」ということで、これは2月9日に行いました。

一番上に川崎市民芸術祭「アルテリッカしんゆり」というのがあるんですが、これは毎年連休中にアルテリッカしんゆりという芸術祭を行っているんですが、昨年10周年、今年が11回目の開催ですが、昨年の10周年からパラアートというものを演目の中でしっかり取り組んでいこうということで、昨年はデフ・パペットシアター、今年は「うたのたね」という、これは障害を持つ乳幼児の方を対象としたリラックスパフォーマンスなども含めた公演をすると同時に、ボランティアの募集なども含めて、連続の10回講座ぐらいのアート講座というのを開催しているんですが、その中の1コマとして、今年からこういった区内で活動している皆さんに、実践例を含めて発表していただきました。

来ていただいた人はちょっともったいなかったと。一人一人のお話を1コマで聞きたい、1時間半ぐらいで聞きたいということがあって、いろんな方と知り合えたので、また開催をしてくれというお声もありますので、こちらも続けて、そういった芸術祭の中でもしっかりプログラムとしてパラアートというものを組み込んでいこうということも進めておりますので、あわせて報告させていただきました。以上でございます。

【福田市長】

ありがとうございます。1 番のステッカーなどについては杉山さん、大丈夫ですか。杉山さんにもご協力いただいて。

【杉山委員】

こちらこそありがとうございました。大塚さんにもご協力いただいて。

約40店舗の紹介等がスタートしているんですけれども、今後に関しましてはさらなる店舗の拡大という部分と、あとは日本語だけではない、インバウンドに向けた多言語の発信というところを進めていくことが必要かなと思っています。あと、話したように、飲食店は人が集まる交流の場ですので、交流の場に発展させていったり、発信の場になれるように次へのステップに持っていけたらなと考えています。

【福田市長】

大塚さんにもご協力いただいて。

【大塚委員】

調査をさせていただいたんですけれども、42店舗やらせていただいて、その中でちょっと特徴的だったのが、お店側としての情報がなかなか出てなかったということで、お店としてはバリアフリーとして言いたいんですけれども、実際行ってみると入り口に4段段差のあるところがありまして、エレベーターはこちらですというところへ行ってみたんですけれども、実際そこは階段を上らないとエレベーターに行けないというところだったんですが、実はちゃんと調べてみると、ビルの奥のほうにスロープがありまして、裏口に入ると、そこから業務用のエレベーターに乗って、そのお店に行けるというものがありまして、それはホームページ上ではその飲食店さんは出してないですし、そういったちょっとマニアックというか、別入り口からであれば入れるというものをしっかりと今回は出せたのではないかと思います。

あとは成田共同委員長も含めて、パラアスリートの方に5名協力をいただいたので、そういったアスリートが調査をするというのは初めてだったものですから、今後そういった川崎市内在住のパラアスリートだけではなくて、一般市民の方からもしっかりと調査員を募集して広めていければと思っています。

【福田市長】

ありがとうございます。

それでは、今ご報告いただいた中でご意見、ご質問などございましたら、ご発言いただ

けますでしょうか。

【大塚委員】

菊地さんのところの「オープンエアメーカーになろう」という絵本すごいなと思ったんですけども、これって販売はされないんですか。

【菊地委員】

実は従来的にはそうしたいんですけども、今、これは国の事業で予算をいただいて、川崎市のほうでこれをつくっていただいて、もちろん著作権等も含めて、今後販売も含めてどういうふうに展開していくかというのはちょっと課題というか、そういう方向にはいくと思いますけれども、今、具体にはまだ決まっておりません。

【大塚委員】

わかりました。ありがとうございます。

【福田市長】

教育委員会からも報告を受けたんですけども、先ほどご報告があったように、目隠してみたり、手を縛ってみたりという形で子どもたちのグループでやると、どうやったらみんなで遊べるかというのを勝手にどんどん作り出していくというのが、実に子どもたちは柔軟性があるというのにみんなびっくりしたという話をしていましたけれども、こういったモデル的な事業のやり方というのは、学校にあわせて水平展開をどんどんしていくという、いいモデルになったんじゃないかと思いました。座学だけでなく、実際にやってみて楽しみながらというので意識も変わって行って、行動も変わってくるということの典型じゃないかと思って、いいものをつくっていただいたなと思います。こういうのは川崎市内だけでなく、ほかのところにも広めていければいいなととても思いましたね。

まだ時間ございますので。どうぞ、お願いします。

【中森顧問】

1点あるんですけども、1つ非常にいいなと思ったのは、ブリティッシュカウンシルのイギリスの基本的な社会モデルという考え方の中で、障害というのは障害当事者は障害じゃなくて、社会がつくり出しているという考え方は前にもずっと聞いていて、そういう観点で物事は進めていくべきだろうというのはすごく思いました。

感想として、オストメイトを公共の区役所に置く。これは障害のある人たちが困っているからつくと。随分前から、例えば段差がないとか、バリアフリーとか、こういう言葉があるんですけども、公共のところは随分そういうことで広がっているんですけども、

ホテルとか飲食店とか、そういうところはまだまだ考え方が広がってないと思うんです。それをパラムーブメントでもっと発信してほしいなと。要は社会が障害をつくり出しているという言葉をもっと広げてほしいというのが1つ。

もう1点はColorsの取組ですけれども、Colorsを見たときに感じたことは、一つ一つのColorsというのは、それぞれの人の個性というふうに読み取っていくようなものにちょっとシフトできないのかなと。要は多様性とか、それをColorsで表現しているということにつながるように感じたんです。一人一人はいろいろな個性がありますと。その個性を川崎は大事にしますという象徴で、このColorsというのをつくったらいいいのかなと。これは個人的な感想です。

【福田市長】

Colorsは、私たちの今のブランドメッセージがColors Futureという。

【中森顧問】

ここに書かれてないから、それをもっと強く打ち出したほうがいいかなと。

【福田市長】

なるほど。わかりました。

【中森顧問】

Colorsというのは、一人一人多様な人たちが活力ある生き方ができる。そういうことを川崎は応援していますよというメッセージですよ、多分。

【福田市長】

そうです。

【中森顧問】

だからもっと強く出したほうがいいと思う。

【福田市長】

わかりました。このColorsかわさき展は、山田商工会議所会頭にも大分ご協力をいただいて、経済界にもいろいろ発信していただいたと思いますが、何かコメントいただいて。

【山田委員】

すごくすばらしいなと思ってね。作品もずっと見せてもらったけれども、ああいった作品をつくっておられて、さっきお話があったとおり、継続していくというのでよかったなと思っていて、前回ここで話したけれども、これずっと継続して、まさにレガシーにしていきたいということを思いますね。

それで、私も作品を買わせていただけたけれども、1人、その作家本人と話す機会があって、先生も一緒に見えたんだけど、一緒に記念写真を撮ったんです、作品を2人で持って。そうしたらすごく喜びまして、笑顔になって楽しくという感じを受けて、本人が喜んでいと。

そこで、今日の話の中で、41作品で24作品をそれぞれ買っていただいたということなんだけれども、作品を買っていただけるように、当日とか、情報がわかれば買われた方もおられたらと思うので、全作品が何かの形で販売できればいいなという感じもしました。

【福田市長】

ありがとうございます。フロンターレの社長とも話したんですが、来年はフロンターレとしてもColorsかわさき展にちょっと協力できないかみたいな話もしていたので、私も宣伝したつもりなんですけれども、後から知って、何だ、言ってくればよかったのにといい人たちが結構いたので、文化財団はもちろんのことですけれども、川崎市としてもしっかり広報できるように頑張っていきたいと思っています。

【山田委員】

いいでしょうか、別の件だけでも。大塚さんに伺いたいんですけど、42店舗、店舗の方々はこの事業についてどういった意見がありましたか。少し教えてください。

【大塚委員】

さまざまな意見は出たんですけれども、自分たちのお店としてはバリアフリー化しているつもりだったというところがあったんですが、実は店舗と敷地の入り口のところに縁石があって、その5センチを見落としてしまっていたとか、そういったことがあったので、予約があった場合には縁石のところまでお迎えに行って、アシストすることもやってみたいというお話が出たりとかしました。

あとは今までは飲食店だけでやっていましたけれども、今回、飲食店以外でちょっと象徴的だったのは、私も同業なんですけれども、不動産業の会社さんからはどういった物件を提供していいのかわからないということで、それは障害の程度とか種類によって違うので、一概にどれがバリアフリーな物件ですと。全部平らになっていればいいというわけではなくて、もちろん視覚障害の方からすると、段差はあってもここにしかるべき表示があったほうがいいのかというがあるので、対話を大切にしてくださいというお話をさせていただいたら、意外と腑に落ちたというか、今までは高いハードルを超えなくてはいけな

いという感覚ではあったものの、自分たちが積極的に話していくこと、声かけすること、手助けをすることは、意外とそんなにハードルが高いことではないんだなというところにつながっていただけたのが非常にありがたかったなと思います。

逆に、マイナスの意見というのは今回1個もいただいてないので、どうしたらいいですかというご質問のほうが多かったです。こういうときはどういうふうにしたらいいのかと。非常に簡単ところで、一般のお客さんと全く同じですと。リクエストを聞いていただいて、それでお店側が要望に応えられるかどうかいうことで判断して、接客サービスをしてくださいということに落ち着きました。

【山田委員】

経済界としてこれをもっと拡大していきたいと思っていますので、店舗の方々は非常に前向きというか、協力的という感じのようですね。

【大塚委員】

はい。ただ、ハードルは高いと思っていらっしゃる方が多いので、バリアフリー化についてはハードルが低いんだということは周知をしていく必要があるかなというのは感じております。

【山田委員】

どうもありがとうございます。

【福田市長】

中澤さんコメントを補足的にいただければ。

【中澤委員】

いろんな企業のいい点、もともと私はコンサルをやっているので、企業として、今の店舗の話も含めてバリアフリーと聞くと、まずおっしゃるとおりハードルが高く、お金がかかる。そこからまずハードルが高いという、お金がないからやれないというところでとまってしまうのが多いので、やってみたらそんなにお金をかけなくてもできることは全然あるよと。みんな気持ちはあるけれども、何をしたらいいかわからない。さっきもいろんなところで意見があったと思うんですけども、多分そこからスタートなのかなと。多くの障害のある人がまちに出るようになっていけると、自然と触れ合う機会が増えてくるので、そうすると今のこのパラムーブメントに乗っていくと、ますます勢いよく広がっていくのかなと。

実は去年は休んでしまったんですけども、今年に入ってある企業が、芸能系のエンタ

ーテインメントの大手の会社のコンサルもやっているんですけども、ここにパンフレットもあるんですけども、障害者差別解消法を業界全体としてしっかり対応していかないといけないというのがあって、自分たちの会社はそれの先頭を切ってやっていこうということで、ダイバーシティガイドラインというのをつくろうという話になって、例えばどんな対応をしたり、どんな接客をしたらいいのか。今まではこういう対応をしてきたけれども、これは実際、法的にはどうなのか、認められるものなのか、あるいは認められないものなのか、このあたりも企業としては、その辺のガイドラインがはっきりわからないと会社全体としては進めない。

そういう意味で今回の川崎市の話を知っていると、これを1つのヒントしていろんな企業に知ってもらうことで、市内だけではなくて全国に広がるチャンスがあるのかなと。

私の今やっている企業さんも、全国のドームツアーというのをやっているところなので、ドームの見直しも彼らから声をかけていこうと。もともとはそこは野球場とか、そういうものだけでも、エンターテインメントとしても大きな力を持っているところがみんな横並びで、エンターテインメントの業界全体で取り組んでいくということをやっていくと、もちろんアーティストも含めて、その後の構成員もみんな声をかけてくる。そんなことをやっていくと、きっと大きな展開に一気になるんじゃないかと思うので、川崎市さんのいろんな取組をもっともっと知ってもらってつながっていくと、自治体もそうですけれども、日本中の企業から求められるようなものが発信できたらいいんじゃないか。そんなことを思っていたところです。

【福田市長】

ありがとうございます。

ほかに何かご意見、ご質問ありますでしょうか。よろしいですか。

【中森顧問】

1つ。オストメイトって交換するのに幾らかかるんですか。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

前広便座につきましては13万円ぐらいかかります。

【中森顧問】

13万円ぐらいでできちゃうの。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

はい。そうです。これは13万円ぐらいです。

【中森顧問】

ありがとうございます。

【福田市長】

よろしいですか。

それでは、続きまして、資料３の英国事前キャンプにおける昨年及び今年度の主な取組について、事務局から説明をお願いします。

【笹倉オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

それでは、英国事前キャンプ受入に関する昨年度及び今年度の主な取組について説明させていただきますので、資料３をごらんください。

まず初めに、昨年度の取組について紹介させていただきます。英国代表チーム受け入れに向けた取組でございますが、昨年１２月に英国オリンピック協会ＣＥＯのビル・スウィーニー氏による講演会を産業振興会館で開催しまして、市内外から約２００名の方が参加されました。また、今年の３月には英国パラリンピック協会新ＣＥＯのマイク・シャロック氏が市長を訪問しまして、意見交換を行っております。事前キャンプサポートだけでなく、大会本番でもぜひ選手を応援してほしい、また選手と川崎市民の交流ができる機会を設けたいと思っているとのメッセージを頂戴しているところでございます。

次に、広報用動画制作と放映開始についてですが、事前キャンプの周知及び機運醸成を目的といたしまして、英国代表チームＰＲ動画を２本作成いたしました。オリンピック版、パラリンピック版ともに１本３０秒、英国代表チームの事前キャンプを川崎市で行うという周知と、英国代表チームを応援しようという２つのメッセージを字幕で入れております。本日、動画のご用意をしておりますので、どうぞご覧ください。

(映像上映)

【笹倉オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

この動画は今年の２月からアゼリアビジョンなど市内２９カ所で放映中でございますので、機会がありましたらぜひごらんいただければと思います。

次に、ＰＲブース出店でございます。昨年度は８月２５日のかわパラ２０１８を皮切りに、市内各所において事前キャンプの周知を図っておりまして、昨年１２月以降では１２月１６日のフロタウンさぎぬまのスポーツ体験会をはじめとして、ごらんのイベントにおきまして英国代表チームＰＲブースを出店、市民の方から応援メッセージを集め、ＢＯＡ・ＢＰＡに送付したほか、ＧＯＧＢウェブサイトや市ウェブサイトで発信したところでござ

います。

ページの右側のほうに移りまして、今年度の取組でございます。

まず初めに、B P Aとの施設賃借契約の締結でございますけれども、等々力陸上競技場における英国パラリンピック陸上チームによる事前キャンプでの使用に関する契約を今月中に締結する予定でございます。

次に、事前キャンプボランティアの募集開始につきましては、ボランティアの要件、募集人数、選考方法などを決定し、6月から募集を開始、あわせて募集の説明会を開催する予定でございます。なお、役割分担といたしましては、ボランティアの募集・選考は川崎市、研修の実施はB O A・B P Aが担う予定となっております。

次に、プレ事前キャンプの実施と英国選手等との交流ですが、5月8日、9日の2日間、オリンピック陸上チームのプレ事前キャンプを等々力競技場で受け入れ、あわせて市民の方との交流を行いたいと考えているところでございます。

また、現時点では未定ですが、B O A・B P Aと調整をいたしまして、テスト大会などで英国選手が来日したときに交流イベントを開催する予定でございます。

最後に、機運醸成・市民エンゲージメント事業の集中実施でございますが、11月23日の勤労感謝の日に高津市民館で開催予定の英国交流イベントのほか、保育園、小学校、中学校における英国メニュー給食の提供、川崎英国事前キャンプP R大使に就任した、きかんしゃトーマスキャラクターを活用したさまざまな広報など、プロモーションを展開していく予定でございます。説明は以上でございます。

【福田市長】

それでは、事前キャンプについてのご意見、ご質問いただけますでしょうか。

【大塚委員】

広報用動画のところですが、これはアゼリアビジョンなどで放映されるんですけども、YoutubeとかSNS上でシェアする著作の関係はどうなんでしょう。

【笹倉オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】

Youtubeでかわさきチャンネルという川崎市公認の公式チャンネルがございますので、そちらからご覧いただくこともできます。

【大塚委員】

ありがとうございます。

【中澤委員】

すみません。ちょっと休んでいたの追いついてないかもしれないんですけど、一番前に話したときに気になった宿泊施設の問題は解決したんでしょうか、キャンプに関して。

【福田市長】

キャンプの市内での宿泊問題ですか。じゃ、ちょっと説明してもらっていいですか。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

前も市内で宿泊施設というお話があったんですけども、いろいろと事業者さんとも調整をしながら、こちらとしてはかなり用意が最終的にはできたところまでいったんですが、BPAのほうで1年前に宿泊施設に泊まれないことにはだめなんだということで、その話はなくなってしまい、今、オリンピック・パラリンピック両チームとも横浜のみなとみらい地区のホテルに宿泊をするというところで、今、特にパラリンピックチームについては宿泊施設から川崎の練習施設への移送の問題が今度はありませんで、車椅子を移送する車両などがない中で、川崎市の中でサポートできる範囲で今調整をさせていただいている状況でございます。

【中澤委員】

部屋とかは十分あったんですね。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

部屋につきましては、ベースが横浜のインターコンチネンタルホテルになると聞いているんですけども、みなとみらい地区でも部屋数が足りなくて、ホテルを改修するというふうに伺っています。その交渉もほぼほぼできているようですので。

あと、私どもから言ってあれですけども、横浜市がこの4月から宿泊施設のバリアフリー化に向けた補助制度を創設しておりますので、そういうものをうまく活用していければ、多少なりともホテル側の負担、BPAの負担などが違ってくるのかと思っていますが、その辺の実態がどうなっているか、今こちらでは把握していませんが、横浜市がそういう制度を創設しております。

【中澤委員】

私は東京都でその関係に関わっており、大幅に足りない状態はまだ変わってなくて、助成金も東京都からお金はいっぱい出しているんですけども、使ってもらえないと。要は今度のオリパラには間に合わないだろうと、既存のものは。というのは、今、稼働がす

く高いので、なかなか乗ってくれないというところで、やってくれたところに対するメリットはどういうものを出していったらいいかというのを今話している。

前に暮れに聞いたときだと、あそこは800必要だと言われた部屋のうち、300しかないというところだったので、大幅に足りないなという状況で、これからどうしようというところもあるし、ただ、オリパラに向けてというよりは、今東京の場合、条例が国交省の設計標準に合うようなもの、近いものを条例で義務化することになっているので、そのことを考えていくと、先のことを考えても助成金が出るうちにしっかり取り組んで、今からやっていくとビジネス的にも将来に向けて有利だからということで今話をしている。そんなことをやっているところもあると聞いている。

川崎市さんのほうでもこれからもっともっといい施設がつくれば、パラムーブメントの一番感じられるときに取組をやるといいでしょうから、そうやって進んでいるんですが、いいんじゃないかと思います。すみません、余計なことを。

【福田市長】

ありがとうございます。たしかこれは報告してなかったかもしれませんね、前回でも。失礼しました。事前キャンプの1年前に泊まれなくちゃいけないというのだと、全く間に合わなくてしまって、今回チームとしては受け入れ不可能となってしまったんですが、今おっしゃっていただいたように、開会のためのパラムーブメントではないので、今後も含めてしっかりと取り組んでいくことが大事だと思っていますので、ありがとうございます。

【中森顧問】

イギリスの代表選手は、多分市民との交流は日本人以上に普通にやってくれると思うんです。パラリンピック選手が川崎で練習するために神奈川にいるときに地域の学校とか、障害のある子どもたちとの交流を積極的にやってもらいたいなと。話をすれば、疲れない時間であれば、多分積極的に何でもやってくれると思うんです。それはぜひ進めていってもらいたいと思います。やってくれるので、日本人以上に多分。

【福田市長】

ありがとうございます。今年も夏、一部チームが来るプレプレがあるんですけど。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

川崎の施設をとというのは今年の夏は今のところないです。正式には言われてないです。ただ、テスト大会がいろいろと始まってきますので、そのときに選手が来るので、大体テスト大会は東京なので、そういうときにうまく交流ができればと思っています。

【福田市長】

ですから、事前キャンプだけじゃない機会に。

【中森顧問】

でも、これ本番もあわせて何かできたらいいのかなと思います。

【細倉顧問】

こちらの資料3の右下のほうにある、きかんしゃトーマスの活用の方法とその下のGOGBグッズの部分ですけれども、いろんな形でこういうものを使っていくと著作権の問題などで、市としては使えるけれども、制約がかかってくるといろいろあると思うんですが、先ほどの資料1のほうで「ワクワクのつくりかた」ですとか、「かつてにおもてなし」という部分は、スポーツの世界でいくと、昔はこうやって押しつけられて、あんたやりなさい、これやりなさい、こういうふうなメニューでやっていきなさいと言っていたのが、今は個性を非常に大切にされていて、自分たちでこういった範囲の中でうまく工夫をしてつくってきなさいという形に変わってきて、それで実力が出てきている。

あわせて、パリで今度ブレイクダンスが有力な候補として入る可能性が出てきまして、その選手に聞くと、教えられるものじゃないと。自分たちで仲間と一緒に話し合って、つくっていくものだということをよく言われるんです。

そうすると、今までの私らの年代の感覚と全く違う部分がありまして、この辺のPRというか、エンゲージメントという部分を、今の1のほうでやった手法をこちらにうまく持っていくと、行政主導ではなくて、子どもたちのほうからとか、市民のほうからうまくそこを盛り上げていくシステムをつくっていくと、かなりいい形になっていくのではないかなと。その中できかんしゃトーマスとか、その辺をうまく交渉して、その中で市民が使うような形で持っていくということで考えていかれるといい形になるのではないかと思います。

【福田市長】

ありがとうございます。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

今の点でございますけれども、エンゲージメントについてはまさしくおっしゃるとおりだと思っております、実は先ほど冒頭に3課長体制にしたということは、今まではパラムーブメントの取組はパラムーブメント、事前キャンプの取組は事前キャンプということだったんですけれども、この4月からエンゲージメントを両方から切り離して、エンゲ

ジメント担当として一体的に推進できるような体制にしておりますので、当然そのところは認識をしながらさせていただきたいと思います。

また、先ほどの動画にもございましたけれども、G O G B 2 0 2 0 というロゴにつきましても一応組織委員会の了解をもらってつくらせていただいていますし、実は川崎市とB O A ・ B P A のマークの複合マークも I O C 、 I P C まで確認をしてとらせていただいていますので、うまく市民を巻き込んだ形で展開していければと思っております。

【福田市長】

ありがとうございます。山崎さん、G O G B とかきかんしゃトーマスを使って、順序は逆なのかもしれませんが。

【山崎委員】

順序は逆なのかもって、市長のあれもおっしゃるとおりなんです。だから多分、両方要るんだと思うんです。許可をとらなきゃいけないものというのはやっぱりあるので、トップダウンみたいにしてやっていかなきゃいけないものもあるし、ちょっと聞きなれない言葉ですけども、トップアップというのも必要で、実はトップの意識を変えていくことによってボトムがアップしていくというやり方もありますから、いろんな方法があるんですが、エンゲージメントをやるときに結構大事なのは、市民参加のときに役所とか専門家というプロが、最高においしい料理をレシピを書いてつくらせるというやり方じゃなくて、理想は市民が冷蔵庫をあけたときに、そこにある素材でおいしい料理がつかれるようになることというのが、エンゲージメントとしては一番高くなるんです。

これはつまり、市民にはこんなことできる人とあんなことできる人とこんなことできる人がいますとやったら、この3人が集まったからこんな形になりましたというのは後で見えてくるものなんです。例えばマスタープラン型というのは、こういう形をつくってほしいので、このパーツとパーツとこのパーツを完璧につくってねってプロに発注するというやり方なんです。

これどっちがいいわけじゃないんだけど、両方やらなきゃいけないんだけど、市役所とか、今オリンピック委員会もやっていますけれども、オリンピック委員会に何度言っても伝わらないのは、こういう完璧なものをやらなきゃだめなんだと専門家みんなに言って、金を払って最後までこだわっていいものをつくろうってやるんですよ。やればやるほど市民は、ああ、やってくれたというか、あるいはちょっとどこかを突ついたり、炎上させたり、この決め方はどうだという話をしてきたりするので、両方が必要で、その

両方が必要なときに市民参加型で進める方法を市役所がうまく進めようと思ったときは、発想を全く逆にしなきゃいけない。

とっても高級な料理のいいレシピに基づいて材料をちゃんと買ってきて、きっちりつくるんじゃなくて、市民が自分たちで発見したものでうまくつくっていくというのをどうやって醸成していくのか。ファシリテーションですよ、これまさに。そこをどうやってつくっていくのかということ、役所であつたり専門家の側がきっちり認識しておくことが、エンゲージメントを高めていこうと思うときにとっても大切になるんじゃないかなという気がします。

【福田市長】

ありがとうございます。

【山崎委員】

トーマスだめと言っているわけじゃないんですよ。トーマスも要るんだけど、同時にどうしていくかですね。

【福田市長】

そうですね。ありがとうございます。すてきなコメントいただきました。

ほかございますでしょうか。せっかくですから、一言ずつでも何か。この事前キャンプじゃなくても結構です。前の話も含めてありましたら。あと5分ぐらいでありますけども。お願いします。湯浅さん、どうぞ。

【湯浅委員】

すみません。先ほども発言させていただいたんですが、まず1つは、英国のキャンプをしていただくということで、これだけの大きな広がりをも市の中でつくっていただいて、全面的にサポートしていただいているというのは、英国にかかわる仕事をしている者としてうれしいなと思います。

今日ちょっとお話を聞いていると、最初のところの議題でも、今回の事前キャンプの件でも、1つの課題としてはいかに民間を巻き込むのか。ホテルのアクセシビリティの問題というところも、いかに民間事業者を動かしていくのかというところは、川崎だけではなくて日本全国の課題で、ニュースにも非常になっていると思うんです。

英国の事例もちょっとご紹介させていただきたいんですけども、ロンドンパラリンピックのレガシープロジェクトの主要なものの中で、グローバル・ディスアビリティ・イノベーション・ハブというコンソーシアムができたんです。それは高等教育関係と芸術

機関と、いろんなところがコンソーシアムを組んでいるんですけども、特にインクルーシブなまちづくり、なのでホテルなどもそうですし、というところでのアクセシビリティをいかに高めるか、誰もが排除されないまちづくりをするかということとアシスティブ・テクノロジーを使ったイコールな社会を実現するということなんですけれども、彼らがすごく言っていたのは、民間事業者の方の場合、特にホテルだと今稼働がいいだけに、アクセシブルルームをつくと、それは稼働が悪くなるからやりたくないということになることがあると思うんです。

そうではなくて、本当の意味でのインクルーシブというのは誰も排除しないということになると、おそらく今、パラムーブメントが目指しているのはまちに出てこれない障害のある方とか、そのほかいろいろな障壁のある方々が住みやすいまちをつくるということなんだと私は理解しているんですけども、そういう方が旅行に行く、外食に行くということになると、それはビジネスチャンスになるわけです。実際、英国でも、そういった方々とその介護者の家族の方が今社会に出られないので、そういった方が社会に出ることによる消費の効果というのは数字で出ているんですけども、そこでチャリティーでやる、慈善事業としてやるのではなくて、ビジネスケースであるという議論をいかにつくるかということ。

もう一つ、この間、グローバル・ディスアビリティ・イノベーション・ハブの方が来たときに国交省ともお話をしたんですが、アクセシブルルームをつくと、どうしてもそれはある方しか使わないので稼働が落ちるというふうになるんですが、すてきなデザインのアクセシブルルームというのがあるべきなんですよ。それによって障害ある方だけでなく、高齢者の方、これから日本は高齢社会なので、私も含めて誰もがそういったお部屋のほうが使いやすくなる可能性がすごい高いので、そういったことができるような認識と議論形成をしていくことなのかなと思うんですが、ちょうど今日お話をお聞かせいただくと、かわさきパラムーブメントの中で一つのゴールとして、市全体としてそういったふうになっていこうというのがあるのかなと思いました。

そこで、この事前キャンプの中でアスリートの交流、市民とのエンゲージメントもそうですし、アーティストの交流もそうですが、より幅広い多様な担い手とかセクター、特にビジネス同士、または皆さんのようなご専門の方々との英国の交流が促進されていくといいのかなと思ひまして、ご紹介をさせていただきました。

【福田市長】

ありがとうございます。ほかよろしいでしょうか。土岐さんのほうはよろしいですか。大丈夫ですか。特にないようでありましたら、よろしいですか。

それでは、事務局から何かありますでしょうか。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

その他の中では特にこちらではないんですが、次第4の中で多田委員と横島委員から告知がございますので。

【多田委員】

先ほどちょっと告知に触れてしまいました。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

それでは、横島委員。

【横島委員】

お手元にこういったグリーンのリーフレットがあると思いますが、「障害者差別解消法ってご存知ですか？」という合理的配慮の提供という、社会参加推進センターのほうでこれをつくって、当初、障害者の関係、福祉団体、施設等にお配りしたところですけども、これって中身を読むと、パラムーブメント実践店がせっかく動き出している中で、これを情報提供という形でお配りしたらどうなんだろうかということでオリパラ推進室とお話しさせていただいて、こういうのだったら連名で実践店にお送りすればいいんじゃないかということで、それぞれ3部ずつお送りしているところでございます。以上です。

【福田市長】

ありがとうございます。これはわかりやすくていいですね。

あと、先ほど告知がありましたけれども、サイバスロン、これは5月の連休中にございます。山田会頭が実行委員長という形でやられて、これはスイス連邦工科大学から始まったものですけども、先ほど案内があったように日本ではここ、車いすシリーズですね、ほかの5種目については世界の都市が誘致しているということなので、世界中から人が集まってくるということで、ぜひ皆さんにお越しいただければと思っています。

それと、今日は時間の都合上、あんまり説明がなかったですけども、これにかかわっている民間の企業さんたちが新しいテクノロジーをこの機会に提供するというので、こんなのはなかなか聞いたことないなというような、見たこともない製品みたいなのをこの場を通じて展開していくということになるので、先ほどの湯浅さんの話じゃないですけれ

ども、技術で社会課題を解決していくというものの意味いい実践の場になるのではないかと、ショーケースにもなるのではないかと、これは報道の各マスコミに言ってもかなり興味を示しています。というので、せっかく川崎でこれができることになりましたので、ご参加いただければと思います。

【中澤委員】

市長、済みません。今聞いていて思い出したんですが、実は委員の遠藤さんも関係あるんですけれども、乙武さんのOTOTAKE PROJECTってご存じかと思う。あれを今度、一緒に進めるということになって、今のお話はそういうところでもうまく入っていったらええ、いろんな展開ができるのかなと思っているんですけど。

【福田市長】

そうですね。遠藤さんもたしか実行委員の1人、オブザーバーでこのサイバスロンの川崎大会の委員にも入っていただいている、いいコラボができているんじゃないかなと思います。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

つけ加えて、2016年にサイバスロンがスイスであった大会に、遠藤謙さんも電動義足で出場しています。

【福田市長】

ああ、そうですか。

【山崎委員】

ちょっとだけすみません。いいですか、最後の最後。今日初めて来て、ここにすごい情報が集まっているんだなと思ったんです。さっき僕、ちらちらとネットで調べさせてもらっていて、かわさきパラムーブメントって調べると、そのティザーサイトがあるはあるんです。あるはあるって、つくっている方がいたらごめんなさい。あるはあるんですけどね。それから、フェイスブックで見ると、その主体アカウントがないんです。こんなすごい情報がいっぱい来ているけれども、ここにいない人たちに届けることってすごい重要な気が今したんですよ。すごい情報がいっぱい集まってきているから。

ただ、集まってきていて、障害者差別解消法のことなども、これをみんなに配るのは難しいんだけど、うまく翻訳してかわさきパラムーブメントではこことここが使えるようにちょっと編集して出してあげるとか、サイバスロンのことをもうちょっと編集して出して、詳しくはここというふうにちゃんと飛べるようにするとか、ここに集まっている情

報をうまく編集して出していくような組織なのか、チームなのか、人なのか、まだわからないんですけども、少しちゃらくなるんですけども、有名なプロデューサーみたいな人が例えば1人いて、この人がかわさきパラムーブメントについて2020年までずっと言い続けて、みんながついてしまうというのをきっかけにして中身を充実させていくとか、そのやり方がいいかどうかかわからないです。なんかもったいないなと思いましたね。

先ほども皆さんが、情報がなかなか伝わってなかったから、来る人がちょっと少なかったという話をされていたりもするので、常に川崎市民の方々、あるいは周辺の方々が気になるような主体みたいなものがあって、そこから情報がずっと出ているということになれば、自分が探しにいかなくても、ああ、こんなの出たんだとか、ああいう情報あるんだみたいなことができて、これが2020年以降情報発信の物になっていると、目には見えなけれども、レガシー的になっていくのかなという気がしました。すごいいい情報が集まっているので、もっとほかの人が簡単に手にとれるような仕組みがあったらいいなと思いました。

【福田市長】

ありがとうございます。情報発信についてはすごく課題だと思っていますので、いい発信ができるようにもっと頑張りたいと思います。

【山崎委員】

何かあったほうがいいかなと思いました。すみません。

【福田市長】

よろしいでしょうか。大変お忙しい中、どうもありがとうございました。お疲れさまでした。いいですか。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】

最後、事務局のほうから。冒頭にも申しましたが、今回の議事内容はホームページで掲載いたしますので、追って事務局から出席委員の皆様に発言内容の確認のメール等をさせていただきますので、ご協力をよろしくお願いしたいと思います。

なお、次回につきましては10月ごろを予定しておりますので、早目に皆さんの日程を調整させていただければと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

では、本日はこれでフォーラムを終了させていただきます。ありがとうございました。

【福田市長】

どうもありがとうございました。

以上